

特集

多嚢胞性卵巣症候群の 最新知見

—生涯にわたる健康管理を見据えて—

企画者のことば

岩佐 武*

多嚢胞性卵巣症候群 (polycystic ovarian syndrome ; PCOS) は排卵障害を主徴とし、アンドロゲン過剰症状など特有の臨床症状、卵巣の形態変化、および多彩な内分泌学的異常を伴う症候群である。PCOS の病因・病態はいまだ不明な点が多いが、内分泌学的、遺伝学的観点から精力的に研究が進められている。また近年では、PCOS のモデル動物を用いた研究が盛んに行われており、様々な組織を対象とした検討から、より詳細な発症機序が解明されつつある。

PCOS では月経異常や不妊症をきたしやすいが、これらに対する新たな対処法が複数提唱されており、有効性や安全性に関するエビデンスも蓄積されている。また、PCOS では周産期合併症や栄養代謝疾患、および精神疾患の発症リスクが高いことが知られており、生涯にわたる

管理の重要性が指摘されている。

PCOS を適切に管理するためには病態に即した正確な診断が求められるが、ホルモン測定系の変更や診断機器の進歩、AMH 測定の広がりなどに伴い、現行の診断基準に課題が生じている。また、海外で広く用いられている診断基準との整合性を求める声もあがっている。

本特集では「多嚢胞性卵巣症候群の最新知見—生涯にわたる健康管理を見据えて—」と題して、第一線で活躍されている方々に PCOS に関する最新の情報について解説していただいた。PCOS は日常診療において遭遇する頻度の高い疾患であり、正確な診断とライフステージに応じた長期的管理が必要となる。本企画が PCOS の診療にあたる皆様の一助となれば幸いである。

* Takeshi Iwasa 徳島大学医学部産科婦人科学教室(教授)